

利用者支援事業において保育士が専門員として 生かすことができる専門性は何か

人間文化研究科人間科学専攻 51117002 古田美津子

1. 本研究の目的

平成26年度から始まった利用者支援事業において、保育士資格所持者と子育て支援員等である保育士資格非所持者が事業に従事する際に発揮する専門性に着目し、利用者支援事業に生かすことができる保育士の専門性を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法と分析方法

子育て支援について、利用者支援事業が始まるまでの経緯や先行研究論文を参照するとともに、インターネットにおいて「利用者支援事業」または「利用者支援 基本型」で検索して抽出した北海道から鹿児島までの100施設について、平成29年度時点でのアンケート調査を行った。質問紙の内容については、桜花学園大学大学院研究倫理審査委員会において倫理審査を受け承認（受付番号04）されている。

利用者支援事業に必要な専門性の質問については、平成21年度施行の保育所保育指針解説書⁽¹⁾にある6つの保育士の専門性（以降、「6つの専門性」と記す）をもとに設問した。具体的な項目内容の一部を表1に示し、結果の説明には表1の番号で示す。質問紙は、平成30年2月25日～3月2日に郵送して4月3日消印までのもの53件を有効とした。

さらに、利用者支援事業専門員の経験があり、保育士経験30年以上のA氏とB氏に対してそれぞれインタビュー調査1、2を行った。インタビュー調査1（A氏）に対しては自然な会話の中で行い、調査2（B氏）に対しては、事業にかかる具体的な7つの場面を想定して行った。調査の内容については個人が特定できないような倫理的配慮を行うことをA、B両氏に説明し、それぞれの許可を得た上でICレコーダーに録音した。録音した内容を逐語録化したものをデータとし、筆者の他、保育士経験が30年以上あるC氏とD氏の3名でKJ法⁽²⁾を用いて分析した。

3. 分析結果

アンケート質問紙による調査を分析した結果、「平成26年以降おおよそ3年以内に市町村が地域子育て支援センターや保育所等の施設に併設して開始されている。従事者は保育士資格（97%）または子育て支援員の修了証（25%）等を持ち、正規雇用職員（45人）よりも非正規雇用職員（55人）の方が多い。」といった利用者支援事業の概観が分かった。

利用者支援事業に必要な専門性の質問について6つの専門性のうち、基本型施設の回答は、

表1にあるように1aと1bに示される「子どもの発達への理解」、2aと2bに示される「保護者等への相談・助言に関する知識・技術」、3の「親子関係を構築するための知識・技術」の3つの専門性についてのみが高い結果となって表れた。質問紙の回答者のうち確実に保育士資格を持っていると判断できた7名について

の回答を表1で見ると、1b以外の項目については、全てが高い割合で回答されていた。1bについては、1aを選択したため選択しなかった人がいたことが推測されるが、6つの専門性のうち全てのものについて高い割合が表れていることが分かる。インタビュー調査1、2の結果からは、実際に親子が目の前にいない場面においても、質問紙の調査では低い結果となっていた表1の4、5、6を含む6つの専門性が発揮されているという結果が表れた。また、B氏の「そういうものとして流れちゃってるから」という語りからも、保育士としての専門性に対して無自覚になっていることが分かった。

4. 考察

質問紙の回答で一部の専門性についての項目しか表れなかったことは、専門員の意識の持ち方に原因があるのではないかと考える。保育士資格を持つ専門員たちは、事業の目的である「情報提供や相談・助言」に強い意識を持っている。そこで、目の前にいる親子への働きかけに対する意識だけが無意識のうちに強くなり、その結果、質問紙の回答に偏りが出たのではないかと推測する。インタビュー調査によると、実際に親子を目の前にした時だけに限らず、事業の計画を練る場面において、また、計画の紙面上や実際の場所においても、事業進行中の環境設定等においても保育士としての6つの専門性すべてが発揮されていた。また、A氏とB氏は、長年の様々な保育の経験や実践を積み重ねながら試行錯誤しながら保護者対応や対人援助等を学んでおり、専門性を土台にした経験知を生かしていた。したがって、この研究の目的である、利用者支援事業において保育士が専門員として生かすことができる専門性とは、6つの専門性すべてと保育士としての経験知であると考えられる。

そして、従事者本人が意識していない保育士の専門性を自覚するためには、振り返りが大切であると考えられる。1日を振り返る際に、親子が目の前にいない時間も含め、さまざまな場面における自らの行動や意識について改めて振り返ることで、無意識だった保育士の専門性を意識し、自覚することができる。さらに、無自覚だった専門性を改めて確認して評価反省につなげることで、それがまた新たな経験知へとつながっていく。この小さな積み重ねを毎日繰り返していくことが、利用者支援事業において生かしていく保育士の専門性のさらなる向上のために

表1 6つの専門性についての回答

番号	項目の内容	基本型施設回答者の回答の割合(%) n=40	保育士資格所持者の回答の割合(%) n=7
1a	子どもの発達への理解	95.0	100.0
2a	親子の支援課題を読み取る力	90.0	85.7
2b	対人能力	90.0	85.7
3	親子関係を構築するための知識・技術	72.5	85.7
1b	発達援助の知識・技術	70.0	57.1
4	生活援助の知識・技術	47.5	85.7
5	遊びを展開する知識・技術	35.0	71.4
6	環境構成の知識・技術	32.5	71.4

※ 1aと1bは「子どもの発達への理解」、2aと2bは「保護者等への相談・助言に関する知識・技術」に相当すると考え、設問項目としたものである。

重要なことであると考える。

注

- (1) 厚生労働省編（2008） 保育所保育指針解説書 フレーベル館
- (2) 川喜田二郎（1970） 続・発想法 中公新書